

シンポジウム

「〈見せる／魅せる〉近世文学」報告

金子 馨・長田和也・中西保仁・林 知左子

アレッサンドロ ビアンキ・南 清恵・加藤弓枝・木越俊介

《パネリスト》

金子 馨（出光美術館）

長田 和也（大東急記念文庫）

中西 保仁（印刷博物館）

林 知左子（西尾市岩瀬文庫）

アレッサンドロ ビアンキ（英国ボドリアン日本研究図書館）

南 清恵（米國ホノルル美術館）

《デイスカッサント》

加藤 弓枝（鶴見大学）

《司会》

木越 俊介（国文学研究資料館）

はじめに

木越俊介

従来に比して、研究者が附属図書館などで資料展示を担当す

る機会は格段に増えてきたが、おそらく各自が手探りで試行錯誤しているのが現状ではなからうか。

そこで今回は、改めて近世文学を〈みせる〉という観点から捉え直すべく、近世文学に関わる展示を手がけられたご経験を有する方々をお招きし、そこから得られる知見や課題を共有し、意見交換をする場を設けた。

文学関連の資料を展示する場合、おおよそ絵巻物を含む書籍や古筆・短冊類などが中心となり、多分に文字を含んだモノを見せるという点において、いわゆる絵画や立体物とは異なる面白さ、難しさが存すると思われる。また、キャプションによって内容をいかに、どこまで紹介するかなど、付加情報の提示にも工夫が必要となるだろう。

展示は、より広い層に対し近世文学が試される場であり、多くの可能性を秘めている。今後は、SNSや新たなデジタルツールの活用などを通して、これまでにない試みもますます増

えていくことが期待される。本シンポジウムを通して、各々の展示のさらなるレベルアップを目指す機運が学会全体で高まれば、これにまさる喜びはない。

また、コロナ禍でのミュージアム閉館が大きな波紋を呼んだことは記憶に新しい。改めてその役割の大きさが実感されるいま、こうしたシンポジウムを開催することは極めて意義のあることと確信する次第である。

パネリストとして、国内外の私設・公設にわたる、美術館・博物館・図書館・文庫といった多様な機関から六名の方をお招きした。一口に展示といっても、対象とする人、規模、取り扱う資料は当然のことながらそれぞれ異なるはずだが、資料を見せるという点では共通している。相互に触発されながら、さらに議論を活発にするべく、加藤弓枝氏にディスカッサントをお願いした。

当日は、こうした狙いどおり、展示を通して資料が有する魅力をいかに引き出せるかという点をめぐって、本質的かつ実践的な話題を、オンライン上で多くの方と共有することができた。

試行錯誤の繰り返し

—「芭蕉展」での取り組みを中心に— 金子 馨

展覧会を開催するにあたってどのような工夫をしているの

か、二〇一九年に出光美術館（以下、「当館」）で開催した「奥の細道三三〇年 芭蕉」展での取り組みを中心にその一端を紹介したい。近世文学に限ったことではないが、作品をどのように「みせる」かについて考える機会になればと思う。

当館では館藏品（主に東洋古美術）を中心に展覧会のプログラムを構成しており、数年に一度は近似したテーマで展覧会を企画・開催する。近世文学に関わるところで言えば松尾芭蕉や仙厓がそれにあたり、芭蕉を例にあげると平均して五年に一度は開催している。しかし、所蔵している作品が変わるわけではないため、鑑賞者（観賞者）が飽きないような工夫が求められていると言えるだろう。切り口を変え趣向を変えてみたり、見せ場（主役）となる作品を変えてみたり、借用する作品によってアクセントを加えたりと工夫している点は様々である。

二〇一九年の芭蕉展では、「おくのほそ道」の旅に着目して企画した展示である。そこで、「おくのほそ道」の旅を描いた与謝蕪村筆「奥之細道図」（京都国立博物館蔵、重要文化財）や、芭蕉の旅が想起される「旅路の画卷」（兵庫・柿衛文庫蔵）などを借用した。他館所蔵の名品を借用することで、館藏品と借用品との相乗効果が期待できたり、館藏品に不足している部分を補うことができたり、と借用品というスパイスを加えることで、いつもと異なる展示空間を提供することができる。

しかし、予算や会期などの都合上、借用が叶わない場合もあるが、展示の仕方を工夫することでも作品の見え方を変えるこ

とができるだろう。たとえば、展示台や展示ケースを工夫したり、ライティングを工夫したりすることがそれにあたる。当館の展示室では基本的には白い展示台を用いているが、雰囲気を変えるために色の異なる展示台を活用したり、造作したりすることで特別感を演出することがある。それによって、似通った企画内容で同じ作品を展示する場合でも、演出を変えることで、作品の印象を変えることが可能となる。

また、ライティングも作品の印象を大きく変える。注目させたい作品にスポットライトを当てることで、他との違いを演出することも可能である。色温度によっても作品の見え方が変わるため、色温度が調整できる場合は実際の作品の色味を念頭に調整する必要がある。

とりわけ、古典籍の展示では暗くなりがちであるが、暗すぎると作品が見にくく鑑賞の際にストレスがかかる。とはいえ、明るければ良いというものではなく、作品（材質）によって累積照度なども考慮しなければならぬ。作品をよりよい状態で後世へ伝え残すためには、その作品の材質をきちんと「調査」し、適切に「保存・管理」しながら作品を活用することが求められている。

さて、作品を展示する際、どのように「みせる」工夫をしているか、その一端も紹介したい。

短冊や古筆切など、細かな文字で書かれた作品（掛軸）は、単眼鏡がないとほとんど見えないことがある。そこで、当館で

はパネル（パーティション）などを用いることで、掛軸に仕立てられた作品は通常よりも手前に展示することが可能となる。表具の小さな掛軸は天地を巻いて独立ケースに展示すると、もとの姿を想像するきっかけともなるだろう。小さな冊子は、ケースによっては見にくくなるため、上から覗いて鑑賞（観賞）することのできる独立ケースを用いて、手許で開いて見ているような感覚に近づけることも大切であると考ええる。

また、絵巻のような卷子や古筆手鑑のような折帖など、右から左へ見進めてゆく方向が決まっている作品は、鑑賞する際の導線にも注意が必要である。手許で開いて見るように小規模にひろげる場合はそのかぎりではないが、長くひろげて展示する場合は、導線や展示する作品の並びを考えなければならぬ。

さらに、屏風はひらく角度によって見え方（受ける印象）が変わる。実際に使用していたように、折れに角度を付けて展示することももちろん、全てひらいて一枚の壁画のように見せることも可能である。その作品をどのように見せたいか、ということを念頭にひらき具合を調整する必要があると考える。なかには、「三十六歌仙図屏風」や「洛中洛外図屏風」などのように、描かれている内容や構図によっては向かい合わせて展示してみたい作品も散見される。

展覧会を作り上げる上で学芸員は図面を作成するが、その手法は学芸員によって異なる。発表者は心地よい鑑賞空間を提供するべく、何枚も何枚も図面を引き直し完成させている。時に

は、頭の中で展覧会会場を歩きながら、繰り返し図面を引くことで展示のブラッシュアップにも繋がっている。展示の構成、流れや導線はもちろん、作品の分量や展示する作品間の距離、作品をどのように「みせる」かを考えながら詰めてゆくののである。最終的には現場調整が必要であるが、何度も図面を引くことでその調整は小さなものになるし、少しでも心地よく鑑賞できる空間を提供することにも繋がると考える。

美術館における古典籍の展示・解説について

長田和也

大東急記念文庫は主に奈良時代から江戸時代までの国書、漢籍、仏書などを所蔵する特殊文庫である。資料は主に研究者や大学生・大学院生に向けて公開されているほか、機関紙『かがみ』に寄せられた論考などにおいてその意義が説かれている。一方で、併設の五島美術館の展示に文庫の所蔵資料が供されることもある。展示室では古典籍も「美術品」として観賞されるのであるが、その価値が記載されている内容と不可分であるという性質上、展示された古典籍の魅力を来館者にどのように伝えるかが問題となる。本報告では令和三年の六月に五島美術館展示室二（展示室一では「近代の日本画」展を開催）にて行った小特集「葛屋重三郎と江戸の戯作者」展を踏まえて、主に作品の横に設置する解説の内容の是非について述べた。

展示ケース内では作品は主に見開き一丁が見えるように置かれる。無論、書物の内容が一丁で見渡せるということはない。また文字だけの丁よりも絵題簽や挿絵などを見せることが見栄えの観点から優先されることが多々ある。いずれにしても作品の内容については解説で補う必要がある。筋を説明すれば作品を読んだということにはならないことは重々承知の上、たとえば山東京伝『傾城買四十八手』であれば各章の登場人物とそのやりとりについて概説することになる。反面、同じ京伝の『小紋雅話』のような絵を中心とするために筋が存在せず、重層的な趣向に一つひとつ注釈を付すことで描かれた模様の意味が浮かび上がってくる作品の場合、限られた字数の文章によってその面白さを伝えることは困難である。たしかに京伝の絵は眺めているだけで魅力的で、是非とも多くの人に見て貰いたい作品ではあるのだが。

反対に、当然のことながら現物を見せることは古典籍への書誌学的な関心を惹きやすい。一つとして同じ和本は無いということを実感してもらうために、同板の書物を二点、後印本には入木されていることが分かるように同じ丁を展示した。その際、研究を身近に感じてもらいたいという思いから、「入木」のような専門用語を（補足説明を加えつつ）あえて解説の中で用いるようにしている。

当時の作品に親しみを感ぜてもらうために、現代人である我々の価値観に沿って展示品を選定し、解説を書くことがあ

る。たとえば葛屋重三郎が一枚刷りの吉原細見を勝手に売り捌く者に言及していることについて、板元として「海賊版」を攻撃して自らの権利を主張していると解説するのは、いかにも共感を得やすいだろう。では現代人にとって理解し難い生活習慣や価値観を背景とした面白さを持つ作品の魅力を、あまり説教臭くならないように伝えるにはどうすれば良いのか。このことは報告者の個人的な課題である。

また、研究史において諷刺の意図の有無が議論されてきた恋川春町『鸚鵡返文武二道』のような、解釈のされ方がその位置付けに深く関わってくる作品を展示する場合、解説において自らの立場を述べるのが躊躇われる。何故なら作品を読んだことのない鑑賞者が展示室内で全編を読むことは不可能だからである。この点、読者も本文を読んで考えることが出来る影印・翻刻本の解説とは条件が異なる。展示をきつかけにして、まずは作品を虚心に読んで貰いたいと考える場合、展示する側と鑑賞者との情報量の違いを意識せざるを得ない。だがそれによって解説が無味乾燥な事実の羅列にならざるを得ないことがあり、先達の魅力的な論考を通じて作品と出会ってきた者としてはもどかしい。なお本展示では展示室内に補足解説のプリントを設置し、そこに参考文献として『日本古典文学大系』など翻刻された本文が注釈付きで読める本を列挙した。展示を通じて近世文学に関心を持ち、作品を読む方が一人でも多く現れれば、これほど嬉しいことはない。

この他、多言語での記載が求められる昨今、京伝の『仕懸文庫』のような注釈を必要とする作品名をどのように外国語で表記するべきかという問題や(結局、Shikake bunkoとした)、鑑賞者にとってはくずし字だけでなく、引首印や落款印などに見られる篆書もまた「読めないけれども関心がある」ものであり、翻刻して必要に応じて典故を解説することで近世文学の世界へと誘うきっかけたりうることについても簡単にはあるが取り上げた。

和書ルネサンス展での〈魅せる〉工夫 中西保仁

二〇二一年に開催した展覧会「和書ルネサンス 江戸・明治初期の本にみる伝統と革新」(以下、和書展)を例に、近世文学の魅せ方を考えてみたい。同展は江戸期の版本、絵巻物、浮世絵や明治期の教科書、小説に、どのような形で日本の古典が生き続けていたかご覧いただく展覧会だった。展覧会を構成する際、まず来館対象となるターゲットを考えることから始める。今回「ひとひねりある文化に憧れ、ブログ・SNS等でリアルタイムの情報交換に熱心なミレニアム世代」をメインターゲットとした。展示造作はもちろん、イベント設計をする際にもターゲットが定まっていると関係者間でイメージ共有をはかりやすい。

加えて、サブターゲットもイメージしておく、特に広告広

報の際に便利。例えば、和書展では次のサブターゲットを想定した。

- ・『源氏物語』が大好きな中高年層
 - ・漫画やネット小説等で『源氏物語』好きな女子高生
 - ・国文学、日本史、日本美術を専攻する学生
 - ・新聞の文化欄やNHK「日曜美術館」「美の壺」のファン
- ターゲットینگとともに、しつこいくらい練り直すのが和書展誕生のきっかけである。何でこの展覧会をやるのか、この展覧会を通して何を来館者に届けたいのか深慮する。

・ミレニアム世代、特に女性に喜んでもらえそうな展覧会はないか？

・館所蔵の資料を中心に構成できないか？

・〈文学と自然〉(日本人の自然観)をつたえるテーマはなに
か？

こうした観点から、源氏物語はじめ古典文学は、どのように現代へ継承されてきたか、来館者と一に考える機会にしたいと和書展を定義づけた。

続いて、和書展を魅せる工夫として留意したポイントは四つ。

- 一、素人目線を忘れずに
- 二、モノへの感動を忘れずに伝える
- 三、めずらしいもの(お宝もの)を開陳する努力と工夫を
- 四、ストーリーで興味をもたせることで、貴重ではない資料

に、新しい価値を付加する

三と四については、「めずらしいもの」対「ストーリーで魅せるもの」の割合が三対七になるよう意識しながら展示資料を選定した。一から四までの魅せる工夫は、すべての展覧会に通底するポイントだと個人的に考えている。調査研究した成果を企画者はできるだけたくさん出したくなるものだが、展示会場でお伝えできるのは経験的にほんのわずか、感覚的には全情報量の一割程度がちやうどいい。来館者にとってそれ以上は「ノイズ」になるのではないか。自分自身、何の基本情報も持たない「素」の来館者であることを想像してみたい。言葉遣い一つ取っても、われわれが普段使い慣れた専門用語でさえ、頭に入ってこないことは容易に想像できるだろう。次の展示キャプションにも言えることだが、シンプルな言葉とプレゼンテーションのみで「モノへの感動」を伝える場に展示会場をすべきだ。後輩の学芸員や学芸員をめざす学生たちにも同じことを伝えていく。

以上の理由から資料解説パネル作成時のポイントはとにかくシンプル、かつデザインを見やすくすべきだろう。

- ・鉄則:「これは何」「ここをみる」
- ・一〇字の世界
- ・キャッチコピーを有効活用
- ・文字は大きく、書体にも気を配る
- ・ケース内に解説キャプションを置かない

私がいつも意識しているのは書店の店頭で目をひくポップである。簡潔なコメントとやわらかい書体。整理されたレイアウト。もちろん、本という商品と展示作品を同列に扱うことに抵抗のある方も多いと思うが、モノの魅力を簡潔に伝えることに変わりはあるだろうか。

最後に、コロナ禍でサンプル数は少なかったものの、来館者から頂いた貴重なご意見をご紹介します。

・デジタル媒体（主にSNS）とアナログ媒体（ポスター、チラシ）が同じくらいの割合で来館の動機づけになっていた。

・ポスターがSNSで取り上げられるなど、紙媒体の魅力を再認識できた。

・連日のツイッター更新も一定程度来館促進効果があった。

・ポップな展示会場づくり、見やすい資料解説パネルを心掛けたおかげで、展示意図がわかりやすい。

・解説が簡単さを目指しすぎており、来館者をミスリーディングしかねない。

最後のご意見がじつは非常に大切だと思っている。コメントいただいた方はおそらく研究者だと思うが（筆者自身当日対応した方なので）、おっしゃる通り、間違ったことを、展示で伝えるにはいけない一方で、背景を知らない方に展示資料と短いコメントのみで、すべてを厳密に伝えるには無理がある。正確を期すため学術論文だけを頼りに展示展開すると、今回のターゲット

ト層には難し過ぎて、一気に展示への関心は減退することになるだろう。目の前にならぶ資料や作品のバックグラウンドを知らない方にどれくらいの情報量が適切なのか、その大事な判断基準にするためにも、やはりターゲットをできるだけ「見える化」しなくてはならないと考えている。

古典籍の豊かさ・面白さを伝えたい 林 知左子

西尾市岩瀬文庫は、明治四十一（一九〇八）年五月六日に地元の実業家・岩瀬弥助が独力で設立した私設文庫を濫觴とする、市立の書物の博物館である。重要文化財はじめ古典籍から近代初頭の書籍、和本のみならず唐本や韓本を含む八万冊余の蔵書は、創設当初からあらゆる人に無償で公開されてきた。弥助が文庫設立・公開に込めた願い―書物を未来永劫伝えること、みんなで楽しむこと―我々岩瀬文庫職員はこの二つを日々の活動の柱としている。

当文庫では平成十五年四月のリニューアルオープンから現在（令和三年十月）までで約九十タイトル、蔵書を使用した企画展を開催している。古典籍の面白さ、ひいては我が国が営々と築いてきた書物文化の豊かさをお伝えしたいと願いつつ、お客様の関心を引くには、楽しんでもらうには…と思索しながら。

テーマ選定（ならびにタイトル命名）は重要要素の一つ。選定条件は数あれど、例えばその時流行っていることや時事ネタ

などは受け入れられやすく、報道の喰い付きもよい。最近では令和の御即位に合わせた「帝」展が好例か。元号の出典で話題となった万葉集の慶長古活字版はじめ、改元や即位に関する資料などを展示し、祝賀ムード、大型連休とも相俟って多くの人が出で賑わった。また昨今のコロナ禍では「悪疫退散」と題し、有史以来人々を苦しめてきた疫病の記録などを展示した。これは、幾度となく疫病蔓延に苦しみつつそれを克服してきた証しを提示することで、「今回もみんな乗り越えよう!」という、岩瀬文庫からのエールでもあった。その時々を生き抜いた人たちの残した奮闘や苦悩の様子は、いつも以上に強い共感を以て受け止められたようだ。

古典籍は絵画や工芸品などと比べ地味なため、展示室にもひと手間加えたい。例えば「昔のあそび」展では展示で紹介した投扇興や智恵の板、絵双六などで実際に遊べるコーナーを設けたり、「虫愛づる人々」展では彩色図譜から転写した様々な虫の絵を展示室のみならず館内中に散りばめたり。もともとこれは虫取り少年や昆虫マニアさんには大受けしたものの、虫嫌いの方には視覚の暴力だったようで、申し訳なかつたと反省している。

また展示と連動して行う講座も古典籍へ誘う大事な手段だ。定番は古文書講座だが、当文庫では知識や解説スキルを上げることはあまり重視せず、その時の展示に出陳中の蔵書から良さを抜粋し、読んで楽しむことを目的にしている。く

ずし字という普段見慣れない文字がネックになってはいるが、少々サボートして一緒に読めば、今でもちゃんと面白かったり感心したりと古典籍たちの魅力を味わってもらえる。何百年も前の人と意思疎通できた喜びでお客様方の瞳が輝き笑顔が溢れる瞬間は、何度見てもたまらない。

お楽しみ要素を盛り込んだ体験講座は親子連れなどに好評を博している。和紙と絹糸で四つ目綴じ冊子を作る和装本講座は、あちこちから出張依頼がかかるウチの看板講座だ。申込倍率が高かったのは「江戸時代料理教室」『豆腐百珍』など江戸期の料理本から再現したレシピでお料理を作って食べるもので、地元の料理研究家のご協力を得て十回以上開催した。その他、今では失われた縁起物・ぶりぶり作り（「正月はめでたい」展）、ボタニカルアート（「日本人のナチュラルヒストリー」展）、蝶の鱗粉転写法（写真印刷が未発達な時代に行われた羽の模様を写し取る技法）を使った絵葉書作り（「虫愛づる人々」展）等々、直接は本を使用せずとも、さりげなく古典籍や書物文化へと誘導する催しを考える。大がかりなものでは「怪談ナイト」と題し肝試しを行ったこともある。「怪談尽くし」展の関連企画で、まず地階にて『伽婢子』などの怪談をたっぷり聞かせて脅し上げた後、真っ暗な館内を通り抜け、公家の旧蔵書から複製した魔除け札を持ち帰る。館内には蔵書の挿絵を拡大したお化けの絵や文庫ボランティアらが潜み、怖がらせた。ただの肝試しではなく、随所に古典籍を絡めておくのが岩瀬文庫

流である。

展示も講座も、究極は閲覧（必ずしも文字を読まなくとも、挿絵を眺めるのでも触ってみるだけでもよい）へと誘うために行っているようなものだ。創設者・岩瀬弥助の遺志を継ぎ、現在も当文庫では誰でもどれでも原本を閲覧できる。ここでは古典籍の閲覧は構えるようなこと、特別なことではなく、気軽に楽しんでもらいたい。弥助の遺志だからというばかりではなく、それこそが蔵書を守り伝える武器になり得ると考えるからだ。古典籍を、決して過去の遺物だとか研究者だけが必要とするもの、などと思わせてはならない。今の自分にもちゃんと響くものだと感じてもらえた時、その人は古典籍の守護者となる。我々と共に古典籍を愛し伝えてくれるファンを一人でも増やしたいと願い、いかにすればその魅力が届くだろうと、今日も岩瀬文庫の模索は続く。

「その」としての近世文学

——異文化と言葉の壁を超える

アレックスサンドロ ビアンキ

海外では日本美術の展示会がよく行われるが、文学に関わる展示は比較的に少ないのが現実である。それはおそらく、人目を引く錦絵や肉筆画などと違って、多分に文字を含んだ文学作品を見せるには様々なチャレンジが秘められているからであ

る。日本文学の魅力と面白さをより多くの外国人の目に触れさせるために、以下、文学作品の紹介、選択、展示方法、体験型活動の四つのアプローチを探って検討する。

一、外国人向けの作品紹介と解説

西洋の文化機関に勤めている日本専攻の学芸員たちは異文化と言葉の壁によくぶつかると言える。普段は外国人の観覧者は日本語の文字が読めないだけでなく、日本文化の基本知識が浅い方々も多いようである。観覧者の知識をより深めるため、最も一般的な手段として展示室やケースのキャプションボードに展示作品の解説文を付け加える。このキャプションの説明文を作成するために効果的な方法とそうでもないものがある。例えば、細かすぎる解説や長文の翻訳を含む説明文は必ずしも効果的とは限らない。実際に観覧者が長いキャプションを読まない例が多く、その場で細かい解説をざっと読んでも多量の情報は十分に伝わらない。また作品の説明が長くなればなるほど展示の面白さが減ってゆく恐れもある。キャプション制作の理論や実践に関する論文が多いが、要するに効果的なキャプションはただ単に情報を伝達するだけでなく、作品のインタープリテーションを促進する説明文なのである。即ち、これは作品の理解を深めるための、分かりやすい、覚えやすい、楽しい解説である。キャプションを作成するには、知識育成と娯楽のバランスをとるのが極めて重要で、取って簡潔な文章で知識のギャップを埋

めながら、同時に観覧者の興味を惹き続けさせるキャプションこそ、一番効果的だと言えるであろう。

二、文学作品の選択

作品の選択を慎重に工夫し、生き生きとしたディスプレイを設置することは、観覧者の興味を抱かせるために効果的な手段である。書物ばかりを見せると、退屈な一本調子の展示になる可能性が高いが、多様なメディアを選ぶことによって、作品配列のリズムを崩し、単調さを打ち破ることができる。例えば、文学作品の設定やストーリーをビジュアルなものとして描くためには、細かいキャプションを提示するより、屏風、掛軸、錦絵などのような美術作品を利用して、観覧者の興味を引き付けることができる。このやり方を使つて様々なイベントや展示の内容に対応して都合の良いように使い分けられる。

三、文学作品の展示方法

文学の美点と魅力は洗練された文章に限らない。挿絵の贅沢な金銀箔や極彩色、艶摺りや木目込みの特殊な印刷技能なども文学の美しさを反映している。よつて近世文学展を企画する際に作品の内容に縛られず、書物の美しさを目立たせる展示方法を十分に検討しておく必要がある。特に、日本文化に親しくない一般観覧者なら、キャプションの細かい内容解説を読むよりも、見た目でインパクトの強い実物は大きな呼び物となる。観

覧者は見慣れていない作品の形態や外見によく魅了されるので、面白い装訂のある本、色鮮やかな表紙、デザインの良い袋などを適切な光量を調節することによって、和本の美しさを更に引き立たせ、活気のある展示が展開できる。因みに、外見と形態を中心にした展示方法は作品の楽しい内容紹介の仕方としても有効なのである。例えば、仕掛けのある豪華本や華やかな絵表紙などを見せながら、キャプションにストーリーの展開をまとめ、登場人物の名前や役割をビジュアルに紹介することができる。即ち、これは書物の形態や外見から作品の内容への移行を確保する方法で、長い説明文でも知識育成と娯楽のバランスを維持する手段として考えてもよいと思う。

四、実践的な学習活動

凡そ、展示会は受動的な経験であるが、ハンズオンのような活動を展開して、観覧者は作品の実物や複製と積極的に交流できるようにする。また、体験型活動による学習機会は大人ばかりか子供にも人気なので、より多くの観覧者の関心を引き起こすためにも有効な手段である。例えば、和紙や絵の具などの材料を実際に手で触れたり作ったりする体験コーナー、科学技術を利用して目で見えない特徴を示したり書物の構造を分析したりするワークショップ、印刷技術や和本の製作過程を実践して学ぶ仮設工房の経験などの活動に参加する観覧者は斬新かつ刺激的な方法で文学作品が実感できるようにする。

まとめ

以上、文学作品の紹介、選択、展示方法、そしてそれに伴う活動の提供という四つのアプローチについて検討した。これらは、大型展示だけでなく、小型展示、集団用の文化活動やイベントにも使用できる方式である。また、外国人向けの近世文学展というテーマを中心にしたが、時代や大衆格差を問わず幅広く都合に応じて使い分けられる。

古典籍の魅力を海外で伝える試み

南 清恵

海外の美術館で日本の古典籍を展示する際には、二つの大きなハードルがある。来館者の多くが「日本語が読めない」、そして「日本独自の文化がわからない」ので古典籍の魅力が伝わりにくい。本シンポジウムでは、そんな日本語を母国語としないう外国人に古典籍をわかりやすく説明し、さらには楽しんでもらうためにホノルル美術館が取り組んでいる様々な試みを紹介した。柱となるテーマは大きく分けて三つ。①美術館としての強みを生かした展示 ②電子機器の活用 ③イベントでの集客、である。

まず①では、例えば昔家の和歌が書かれた歌かるたを展示する場合、くずし字だけが書かれた作品を展示しても外国人にはこれが何であるのかわからない。そこで菅原道真の肖像画が描かれた掛け軸で「この歌を詠んだ人物はどんな人なのか」を説

明し、手向山に向かう一行を描いた葛飾北斎の浮世絵では「どのような状況でこの歌が生まれたのか」を見せ、そして能の装束を展示することにより「当時の人はどのような装いをしてたのか」を想像させる。さらには『武家百人一首』や色鮮やかな奈良絵本の『百人一首』、歌人たちの姿を描いた九谷焼の壺を同時に展示することにより、百人一首の人気の広がりや来館者にわかりやすく伝えることができる。他にも歌川広重の浮世絵「名所江戸百景」の展示の際には「江戸雀」や「江戸名所図会」などの版本を使い「江戸とはどんな街だったのか」江戸の人々ほどのような生活をしてたのか」を説明することにより一枚の浮世絵から色々なものが見えて来る。さらに『吉原細見』を展示した際には、夫が鼻屑にしている遊女を細見で探している女房達を描いた鳥居清長の浮世絵「誹風柳多留」も同時に展示。浮世絵に描かれた女房達の姿と、そこに書かれた「細見をみてこいつだと女房いゝ」という川柳により「二〇〇年以上前の日本女性もSNSで彼氏の浮気相手を探す今の私たちと同じことをしている！」との共感を来館者に与え、文字しか書いていない『吉原細見』を外国人も興味津々な様子で見ているため、それらを有効に使うことにより古典籍の魅力をよりわかりやすく伝えることができる。これはまさに美術館としての強みだと言えるであろう。

②は様々な電子機器を利用し、古典籍への理解を深める試み

である。例えばタブレットに本や絵巻物のすべてをダウンロードし実物の作品の横に設置すれば、見開き二頁しか展示できない本や長い絵巻物を来館者はタブレット上ですべて見ることが出来る。『青楼美人合姿鏡』を展示した際には版本に書かれているくずし字を英訳し、遊女たちは何をしているのかと言う解説も英語でタブレット上に表示した。同様に『黒船絵巻』にも英語での解説をタブレットに追加することにより、日本文化を知らない当時の外国人たちの愉快なエピソードを来館者に楽しんでもらうことができた。また展示室にあるQRコードからはホノルル美術館のYoutubeチャンネルに飛ぶことができ、展示しきれなかった関連作品をオンライン上で見られるので、現在展示されている古典籍への理解をより深めることができる。

最後に③のイベントとは「まずは美術館に足を運んでもらう」実際に展示を見てもらう」という目的のために始めたもので、本シンポジウムでは普段あまり美術館に足を運ばない若い世代をターゲットとしたArt After Darkというイベントを紹介した。これは美術館閉館後の午後六時に再び美術館のドアが開き、特別展のテーマにちなんだ国の食事とお酒や音楽を楽しむながら展示をみてもらうというナイトイベントである。コロナ禍前の二〇一九年では、このイベントの参加者総数は一年間(十一回)で一万三千七百七十一人となった。このイベントには来館者によるSNSでの情報発信による(コストゼロの)宣伝効果や、来館者たちの生の声を聴けたことによる新たな発

見、そしてこのイベントをきっかけに美術鑑賞の楽しみを知ってくれた人たちが美術館会員となり美術館をサポートし、友人を連れて再訪、という単なる集客という目的以上の収穫もあった。質疑応答の際にSNSでの発信による著作権に関する心配の声も上がったが、フリードメインではないものに関しては作品の横に警備員を置き、撮影禁止の看板を出すなどの対応をとっている。(もちろん飲食物の展示室への持ち込みは禁止)

以上が現在ホノルル美術館が行なっている古典籍の魅力を海外で伝えるための試みの一部である。インターネットが普及し、コンピューター上で何でも検索して見ることが出来る現代社会。だがそんな便利な時代だからこそ本物の古典籍を自分の目で見て、さらにその古典籍に繋がる様々な美術品にも出会ってほしい。ホノルル美術館はそのような「人と古典籍との出会いの場」であり続けたいと願っている。

近世文学を〈見せる／魅せる〉には 加藤弓枝

展示を企画する文学研究者は少なくない。稿者がデイスカッサントに推挙された理由も、大学図書館で貴重書展を定期的に開催している経験からであろう。研究上、書誌学に関する知識は有してはいるものの、書物の効果的な展示方法に関しては素人である。よって、前半の登壇者による討議時間には、展示の専門家であるパネリストへ、稿者の展示経験から感じた事柄を

中心に、各発表内容を踏まえつつ次の三点の疑問を投げ掛けた。

一点目は、展示会場に設置する解説についてである。印刷博物館の中西保仁氏は展示室に設置する解説文は一二〇字内に抑えるという。一般的な分量から約四割を削減していることとなるが、その背景には、展示はあくまでも「入口〓きっかけ」であるという考えがあった。字数を抑えるため、書物であれば実際に開いている箇所の説明に絞り、専門的な言葉については別に解説を設置するなど工夫を凝らす。長すぎる解説は避け、詳細は別に誘導することが効果的であるという、ボドリアン日本研究図書館のアレッサンドロ・ピアンキ氏による発表などとも共通する。一方で、大東急記念文庫の長田和也氏によって示された解説例は、専門的で詳細な内容であったが、それは近世文学の面白さを正確に伝えたいという思いからである。一見、中西氏・ピアンキ氏とは正反対な解説にも見えるが、専門用語を含め間違った言葉使いをしないことや、地味な資料の価値が伝わるように心がけている点が共通する。平安古筆や源氏物語絵巻といった芸術的な価値が高い作品と比較すると、書物を中心とする近世文学作品はその魅力を伝えにくい。ゆえに、観覧者の興味を惹く工夫が、近世文学のみならず古典文学全般の展示には不可欠であることが示された。その方法には、分かりやすさとインパクトを重視する方法もあれば、長田氏のように、あえて専門的に解説して、展覧者の知的好奇心を刺激する手法も

ある。それは展示をする場所によって変わってくる。つまり、誰に展示を見せるのか、その対象により変更する必要がある。また、「魅せる」のは展示室とは限らず、イベントも有効であり、南清恵氏の報告にあった若い支援者を増やすホノルル美術館の取り組みは、多くの視聴者の印象に残ったことであろう。

次に話題としたのは、集客についてである。西尾市岩瀬文庫の林知左子氏は地域住民に古典籍に親しんでもらうことが、文庫の味方を増やし、書物を未来永劫伝えることに繋がる指摘された。これは、ピアンキ氏の図書館・美術館にはコミュニティの人々を集め、人を結びつける役割があるという報告にも通じる。しかし、実際に展示室や閲覧室に人を呼び込むことは容易ではなく、海外で日本の古典文学を展示する際には、とりわけ異文化と言葉の壁があるため難しい。日本国内においても古典を身近に感じられない人が少なくないことから、同様の問題が生じていると言えよう。その工夫として、林氏は学芸員が積極的に来館者へ声をかけ、琴線に触れるであろう書物の存在を伝え、可能であれば実際に閲覧室でその古典籍に触れてもらえるよう心がけているという。このように実際の展示物に触れられれば、より印象に残るであろう。しかし、物理的に触れることはできなくとも、身近に感じられるような情報を発信することも有効である。その一つに、TwitterなどのSNSの活用が挙げられる。SNSによる発信は、普段展示へ出かけない層の興味を惹く契機となり得る。近年、国立博物館・美術館などを

中心に展示物の撮影が可能な施設も増加しており、パネリストの所属機関でも集客に活用しているところがある。しかし、一方で、実際の展示品の写真を拡散することを躊躇する機関も少なくない。この問題は展示物のパブリック・ドメイン化（著作権の保護期間を経過し、自由に利用できるようになったもの）とも関連しており、今後の動向が注目される。

最後に実際の展示方法について取り上げた。浮世絵や肉筆画などとは異なり、多くの文字を含んだ平面的な書物を見せるには創意工夫が必要となる。出光美術館の金子馨氏は、何度も図面を引き直し展示の流れを重視するという。確かに、二〇二一年に名古屋博物館で開催された「大雅と蕪村——文人画の大成者——展でも、入口と出口を入れ替えることで、絵巻などの和装本を右から見られる工夫がされており、古典籍の装訂を意識した展示の流れが重要であることを実感した。また、金子氏は照度を落とすすぎないことも心がけているという。ピアンキ氏や南氏によって、海外での日本古典籍の展示例が示されたが、西洋古典籍の展示で使用される支持台が用いられ、平面的な書物が立体的で美しい展示品となっていた。また、書物と関連する美術品を混在させて見せる、メディアミックスの手法も紹介された。中西氏が指摘されたように、日本の古典籍は立体的にも平面的にも見せることができ、その展示方法は自由であるとも言える。絵画などとは異なり、作品の一部しか見せることができないという制約もあるが、ピアンキ氏や南氏の報告のよう

に、スマートフォンやタブレットといった機器を活用することで、より多くの情報を展覧者に示すこともできる。岩瀬文庫のように展示室に古典籍の複写物を設置するという手法であれば、金銭や技術的負担も初期投資のみで済む。

このほかにも、SNS発信の普及や、展覧者に占める地元住民の増加、事前予約制の導入の副次効果など、コロナ禍によって生じた良い影響についても意見交換をした。

また、後半には視聴者から寄せられた、(1)キャプションの工夫、(2)障がいのある方への配慮、(3)展示物の種類による来館者数の違い、(4)年齢による古典籍への意識の違い、(5)研究者へ期待すること、(6)日本古典籍の展示企画を通す工夫、といった質問にパネリストが回答した。最後には各パネリストから展示にかける理念を発表していただいた。

近世文学は文学史で書名を学ぶことはあっても、実際にその内容に触れる機会は少ない。展示は多くの人に近世文学に出会ってもらえる「入口」である。その入口をいかに魅力的に伝えるか、引き続き研究者も考えていく必要があるだろう。

シンポジウムをふりかえって

木越俊介

以上のように、今回は事務局のご了承を得て、六名ものパネリストをお招きし、ディスカッションにもたっぷり時間をとることができた。このことが内容の濃密さと熱気をもたらしたと

思う。

このシンポジウムは特に何らかの答えを出そうという目的で行った企画ではないので、相互に話題が絡み合いつつも、できるだけ多角的な議論になることが望ましいと考えていたが、おおよそ期待通りの進行となった。本来なら視聴者からの質疑に対するバネリストからの応答内容も記したいところだが、あまりに多岐に渡るのでここにはまとめきれなかったことをお詫びしたい。

展示のスキルという点では、こうした場で個別具体のポイントをめぐって話し合うことよって、ある種の定石のようなものが見えてきたように思う。これはやはり現場の経験という裏付けをともなつてのものであり、マニュアル化して伝わるものではないことを痛感した。

シンポジウムの最後に、バネリスト全員から展示における各自の理念を提示していただいたが、「人と作品を結びつける場であること」「南さん」、「本の魅力を感じてもらうこと」「ビアンキさん」、「来館者と古典籍・書物文化との橋渡しの第一歩となること」「林さん」、「人類に不可欠な印刷・出版文化の役割をモノを通して知っていただくこと」「中西さん」、「対象となる書物よさを伝える、顕彰すること」「長田さん」、「美術品と対話しながら楽しんでいただくこと」「金子さん」と、それぞれの個性がよく出ていると感じた。このようにそれぞれ個性、立場の違いはありながらも、ディスカッションを通して改めて実感さ

れたのは、誰に何をどのように見せるか、という点で問題意識が重なっていることであった。これは当たり前のことかもしれないが、実際に研究者の立場で展示を運営するとなると目の前の多くの問題に対処することで手一杯になり、本質を見失いがちになりがちなので、常に肝に銘じておきたい。

最後に、本大会の閉会の辞の中で飯倉洋一氏が、今回のシンポジウムのテーマは、研究をどう見せるかということにつながるというご発言をされた。オンラインということもあり学会員以外の方にも広く公開されたシンポジウムを通して、私たちの研究を外にどう開いていくのか、展示はその一つの有効な方法であり、さらにそれ以外にも工夫できることはまだまだあるように感じた。